山崎前学長と桃山学院大学の「発展」

経営学部　徐（ソ）　龍（ヨン）　達（ダル）

1.　山崎前学長との出あい

山崎春成教授は，1996年３月，６年間の長期にわたる学長職および理事長代理を全うされて定年退職された。その間のご尽力，ご心労に対し，まずは満腔の敬意を表したい。

私は1963年４月に桃山学院大学に赴任した，いわば桃大34年生の古株である。74年，全国の大学紛争・封鎖時代に２代目の経営学部長にあたり，激動の当時から法人評議員と大学評議員を合算でおよそ20年間つとめた経験をもつ。山崎教授が赴任された89年４月当時も評議員であり，山崎学長誕生の90年からは同じ評議会で，厳しい意見のやりとりもしばしばであった。

山崎前学長は，1993年７月10日（土），大阪駅の「新阪急ホテル」で開かれた私の還暦記念祝賀会にご出席下さり，二百六十余人の参加者を前にして，来賓として唐辛子のピリッときいた批判的なご挨拶をされたことが昨日のことのようにも思える。「唐辛子や　浮き世の味も　なんのその」　唐辛子のきいたキムチを愛用する一人として，前学長のごあいさつを甘受している。その後，私が40年間にわたって奉仕している在日韓国奨学会の財団化基金にもご参加下さったので，機関紙『韓奨ニュース』を通じて日頃，近況を報告している間柄でもある。

そういうわけで，山崎前学長には『国際文化論集』にふさわしいテーマで拙文を贈ることにしていた。いま，韓日間の重要課題になっている「『独島』（Dokto，日本名・竹島）の領有問題に関する一考察」がそれである。ところが残念なことに，入手予定の文献蒐集が思うにまかせず，やむをえず，

「献辞」をしたためることになった次第である。独島の日本領土説への疑問としては，すでに拙稿が「毎日新聞」の全国版（東京本社版96年４月４日付，大阪本社版同年４月10日付など）に掲載された。所期の完成稿は近い将来，学術雑誌に発表の予定である。以下，山崎学長在任中の諸問題を中心に桃大の「発展」への課題を考えることにしたい。

2.　社会科学者と批判のあり方

社会科学を研究する者としてつねに脳裡を去らないことは，建設的な批判（非難にあらず）のないところに真の建設，発展はありえないという認識，それは山崎教授がかつて教職にあった大阪市立大学で私も学んだことであった。他人の文章を読む場合，個性に乏しく，論旨不明の論稿を読むことはかなり疲れる。もっと疑念を呈し，憤慨し，建設的な批判と主張を提示したもの，そしてよりいっそう現実にアクセスして批判精神を盛り込んだ論稿を読みたいものである。

一般に日本人は，本音と建て前を認め，それを上手に使い分けるのが「紳士」だとされているが，それは「世界市民」の育成を目指すという桃大の精神にはそぐわない。目を島国の外に転ずれば，諸国の民は，もうすこし正直に意思を表明するから，日本人は国際比較ではむしろ特異体質だといえる。人間は本来，誤つものである。だから，間違ってもよいから，憶せず本音で披瀝し，相互に理解を深めるべきではないかと思う。

桃大赴任34年生からみるとき，現在の教員，職員の間には無難主義が一般的で，おしなべて覇気が乏しいように思える。それは，桃山学院大学を発展した大学だとする誤った考え方，現状に安住する姿勢にも一因があるようだ。教職員の必死の努力にもかかわらず，大阪市昭和町時代は関関同立に肉迫するまで発展した桃大レベルが，いまや４大学との間にもう一つの大学グループが介在するに至っており，けっして手放しで喜べる状態ではない。

いま流行の「自己評価」（自己点検・評価）は，1991年の大学審議会答申と文部省令「大学設置基準」によって一般化された。主として大学教員の研

究業績を自己点検させ，教員を管理・統制することに重点があるようにみられている（巨大情報システムを考える会編『不思議の国の「大学改革」』，社会評論社1994年刊を参照）。だが，私立大学の発展度を考察するためには，教員のみならず，むしろ，理事会や学長を頂点とする執行部の業績評価がきわめて重要な意味をもつものと考える。かつて私が経営学部の自己評価委員をつとめた時，広島大学で開かれた自己評価をめぐる有意義な研究集会に，学部長も合意して，O教授と出張申請をしたことがある。その当時学長が，われわれの「下意上達」を拒否した理由は，全学自己評価委員会からの「上意下達」でないからとのことだった。これでは自己評価を自主的に研究する気になれるものではない。

ここで，桃大の「発展」に関する三つの具体的な課題を提起して共に考えてみたいのである。

3．大学全面移転は妥当か？

まず，学舎の全面移転について。かつて大阪市内昭和町から堺市の登美丘へ移転する際，教員集会で私は敷地が狭すぎる点と「足」が１本ではまともに歩けないこと（南海電車高野線のみ）から反対意見を述べた。反対意見は一人だけで無関心が多かった。当時，近鉄と南海が交叉する（２本足の）河内長野駅の近くに約10万坪の原野があったが，理事会と大学は眼中になかった。おそらく銀行と電鉄資本に牛耳られていたからであろう。その結末が95年４月の和泉市への再移転となる。結局，長年にわたる堺市学舎整備の努力は水泡に帰した。理事会や大学執行部が前轍を踏まないように，私は要職・某教授を通じて，移転の賛否投票で20％以上の批判票がある場合には，移転を再考してほしい，と申し入れた。結果は，誰一人組織的な反対運動をしなかったにもかかわらず，反対票は38％をこえた（私は出張中で投票せず）。だが，移転は強行され，いくつかの課題が残された。「新しいタタミ」は気持ちがいいに決まっているが，５万坪にも充たない狭い敷地が大学の将来の発展を拘束しはしないか，不便な現地で良質の学生が集まるのか，交通費や

管理費の急増が学院財政を圧迫しはしないか，などである。

評議会やその他の対話の場で，山崎前学長のお考えはほぼ把握することができた。大学は受験生減少の「冬の時代」に突入するから，学部増設などはもってのほかで，現状の維持，学部内整備（学科増も含む）が至上であるとされた。私からみれば，いわば「縮み思考」が持論のようである。低成長時代であるとはいえ，社会の発展がある程度は進行することを考慮すれば，現状維持は相対的に大学の縮小を意味することになる。質的な発展は量的な拡大とリンクして可能であり，たとえば文部省の「臨定」枠の問題では，「学科増」で現状維持をはかっても，相対的には大学の縮小に連なる。

私見では，日本における高学歴神話はまだ続き，進学率も高まるので，「臨定」政策の大巾修正は避けられないとみる。大学「冬の時代」なればこそ，よりいっそう積極的に社会的評価を高めて学生を集める努力をし，外国人教員，留学生や社会人も増やして大学の活性化をはかる。そのためには文化系総合大学として欠落している法律系，たとえば国際間の経済経営法の差異を比較研究する国際法律学部の増設を優先して学科増を２次的に考え，次いで文学部の分割による１学部，さらにもう１学部，つまり，文化系総合大学の将来ビジョンとして３学部増設と各大学院設置を視野におさめれば，敷地は少なくとも７万坪は必要になる。このような考え方に賛同されない大学側に対し，私は次善の策として，新校舎の設計段階で現在の３号館を１号館に積みあげ，将来の学部等増設用地を確保する申入れを行なったが不発に終った。まさしく山崎スケールに収まった新学舎で，今後どの程度の発展が可能なのか，狭い敷地がそのネックにならないよう祈るばかりである。

4.　大学院設置に伴う諸問題

次に，大学院の設置について。経営学部ではその完成年度に大学院の設置を強く要望したが，他学部教員の反対があって実現せず，93年４月の設置は実に「３度目の正直」になったわけである。まさしく悲願達成として喜びにたえないが，教学上の課題などが積み残された。これらは他学部の大学院設

置や教育研究条件の改善のためにも，あえて明記するものである。

私は1989年から桃大大学院問題調査検討委員に，91年から大学院検討委員会委員，のちに経営学部大学院設置推進委員会委員長をつとめた。大学院実現へ3年余りも努力し，初代大学院研究科長も予定されながら，申請直前の92年5月，「外国人教授任用差別」に抗して委員長を辞退し，自らN教授に交代をお願いした。「世界市民」を育成するという桃大の基本理念は，一部教授たちの狭量によって実現はおぼつかないといえる。大学の国際化と外国人研究者の人権擁護のため，私は国公立大学の「外国人教員任用法」(1982年8月20日成立）めざして10年間闘争し，新しい制度を実現させた（日高六郎・徐龍達編『大学の国際化と外国人教員』第三文明社，1980年刊を参照)。国公私大とも任用差別をなくし，定住外国人（permanent alien residents, 筆者の造語で前掲書27頁を参照）を平等に採用した方がよいとする私の希望が足元からすくわれたのである。これでは，委員長として心から続投できない。ちなみに，外国人教員採用や韓朝鮮語などアジアの言語教育などに対しては，特別助成がある。1975年，私が永井道雄文部大臣，時子山常三郎日本私学振興財団理事長と会見して，上記項目を私学特別助成項目に加入することを要請し実現したものである。以来，95年まで約200億円の助成が実行され，桃山学院にもこの20年間で1億数千万円が配分された。桃山学院の財政を潤している実情にあり，今後も配分は継続される。これらは定住外国人教授の働きによる実績にほかならない。

上述の差別事件はひとまずさておき，大学院設置推進委員長としては新設31科目を1教授6コマと計算して，マルゴウ教授を含めて5名の増員を山崎学長に要請した。結局，新規採用は2名どまりで，経営学研究科が重要な柱だと謳う「高度の知識と技能を身につけた職業会計人の養成」「国際会計業務の重視と会計人の再教育」などの社会的ニーズがきわめて高い会計学教授は不足のまま発足した。その後も補充努力をしていないのは，部・科長らの「人災」であるといえる。いま，桃大大学院生による会計ゼミ選択の余地はほとんどない。これを放置することは無責任であり偽善であろう。

96年６月，私は関西地域の経営学・商学研究科を擁する10大学院の実態調査を行い教授会に報告した。そのアンケート項目は５個にすぎないが，会計学教員数，マルゴウ教員数ともに桃大が最低のランクであった。たとえば10大学院の会計学教員数は平均8.2名，桃大は６名で，少くとも２名の増員は緊急事項であるのに，学内では無視されている。

ここで「追想・山崎学長」に際し，教育研究條件改善のために必要な課題をここに明記しておきたい。私は93年９月25日付で「大学評議員等辞退届」を山崎学長に提出した。その全文は，「今春からの桃大大学院経営学研究科の開設に伴う私の持コマ数８コマの強制に抗議して，現職の大学評議員および国際センター委員を93年９月30日をもって辞退いたしたく茲許お届け申しあげます。」となっている。それは，93年６月の第６回学部教授会で，私の持ちコマを７にするため，学部５コマを４コマに特別減担する（代講）「決議」が，教務委員会（当時，U委員長）で文学部選出教員らの反対強く否定され，教員組合（当時，O委員長）でも私の意見聴取の申し入れすら拒んだ不当性に対する抗議の意思表明でもある。研究教育条件の改善に役立たないような教員組合はナンセンスだから，即刻，私は教員組合を脱退した。三十年以上も組合員として私が納付した組合費は総計数百万円!!　私の評議員（人事委員を兼任）と国際センター委員の職務時間を合算すれば，私の負担は優に９コマを超えており，まさに中学校教師並みの過重負担となっていた。そればかりか，他のマルゴウ教授の負担が実質５ないし６コマであるのに対し，会計学教員は教員不足のうえに社会的ニーズが高いので，永久に７～９コマ強制が続くという不公平に対する抗議でもあった。山崎学長時代のこの不条理は現在もなお改善されていない。

意味のある上記の辞退届を，山崎前学長は受理せず，人を介して辞退の理由を「一身上の都合」にしてくれといわれた。その用語は私に何らかのやましい点があるとか，不都合がある場合の用語なので，当然書き替えを拒否した。また，それは教育研究条件の問題性を隠蔽することになるからである。結局，私の辞退届は宙に浮き，事態としては経営学部選出評議員の欠席が続

くため，翌月に至って学部長が「評議員等辞任および交代要員選出の承認願」という前代未聞の文書を学長に提出してそれが認められ，後任の評議員が選出されたという経緯がある。中途退職，病気などを理由としない評議員の中途交代劇は珍しいことではあるまいか。

5.　5部長会議常設の問題性

さらに，桃大の5部長会について。私は桃大34年生の一証人として，大学の円満な運営と発展を願うものである。組織改革の名のもとになされた一部一般教育教員の主張による「5部長会議」は，大学全体にとって果たしてプラスだったのかどうか，再考を促したいのである。前述8コマ強制問題は，経営学部教授会決議の否定，つまり学部自治の原則を破壊した重大な事例であるが，その背景に「5部長会議の申し合わせ」があった。

当時の5部長会議は，学則にもない任意の会議であったが，一部一般教育教員の強い主張と文学部を母体とする前学長とがマッチして出来あがり，その会議が，大学の運営を左右していたといえる。桃大ではこれまでも，専門教育教員の発言は比較的弱く，「一般教育大学」といわれる背景もたしかに存在した。上記5部長会議の申し合わせは，学部持ちコマを5とし，大学院授業は付加的サービスだとする内容であった。そこで，学部4コマ，大学院込みで7コマにしようとした経営学部教授会決議さえも，「5部長会の申し合わせ」が否定する作用を及ぼした。文学部でも9コマを強要された事例があるから，これは全学的な課題である。

現在，文学部は他学部の約3倍の教員を擁する大勢力である。その形成は他学部が一般教育担当教員を排斥したからではなく，一部リーダーによる特殊な意図の反映である。経営学部でも経済学部でも，最後まで新設文学部に所属することを逡巡する一般教育教員がおられたが，遂には文学部に結集させられた。なるほど，学長その他の役職選挙や学内での発言権において，リーダーらの意図は貫徹されている。一般教育部長は，本来なら文学部内の副学部長の形が望ましかったのではなかろうか。大学の自治全般にわたって考え

るとき，学部長並みの扱いが適切な組織改革であったかどうか，再考の余地があると考える。いまや文部省による一般教育の廃止により，俄仕込みの専門教育者が「輩出」することになったが，一般教育部長の職制なきあとの5部長会議はどうなるのか，山崎前学長時代の遺産はどこへおさまるのか，関係各位の勇み足がないように祈りたい。

6.　おわりに——青い唐辛子の祈り——

以上，山崎前学長時代の回想とともに，いくつかの問題提起をさせていただいた。このたびの学舎移転は30年，50年先を展望しうる移転とはいえないけれども，中堅大学として，ここ10年くらいのささやかな発展の基礎ができたことは認めよう。この与えられた条件を質量ともに発展させ，桃大が21世紀を生きぬくためには，昭和町・高校の立地いかんの検討を含む総合的な開発意欲ある理事，教職員の出現が期待されている。

おわりに，韓国・啓明大学校との学術交流の最高の責任者としての山崎前学長に，啓大の名誉経済学博士号が授与されたことを共によろこぶものである。私は，桃大教授会啓明大学調査団長として同大学との姉妹締結への糸口をつくった者として，また20年近く交流への努力をかさねた多くの教授たちとともに，両大学の紐帯強化とさらなる交流の発展を祈るばかりである。

日本の唐辛子はもともと辛いものだ。韓国産の唐辛子は，見かけよりも辛くはなく，まろやかな甘味をもつので，一流のレストランではキムチに輸入唐辛子を使う。この未熟の青い唐辛子も，心ある人にもまれて赤い味わい深い食品に仕上げられるよう念じつつ，かさねて，山崎前学長の6年間にわたるご尽力に敬意を表し，先生ご夫妻のご健康・ご長寿を祈ってやまない次第である。